
俺の家族は稲荷様

ハンス・ヨアヒム・マルセイユ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の家族は稲荷様

【Nコード】

N2580BA

【作者名】

ハンス・ヨアヒム・マルセイユ

【あらすじ】

主人公の風間猛は、ある日一匹の怪我した狐に出会う。彼はその狐を保護する事に決めて家に連れて帰るが、その後彼の目の前で信じられない事が起こる。

其巻 出会い

2010年 7月

何時も通りの普通な生活を送っていた普通の高校生である俺、風間猛は日常では起こり得ない状況と向き合いながら生活を送っている。その起こり得ない状況というのは……。

「猛、お主に言いたい事がある。」

今俺の家の台所で一緒に作業しているこの女がこの家に居る事がその起こり得ない状況なのだ。俺みたいな地味な男にこの金髪美少女巫女が近づく事も起こり得ない状況なのだが、それ以上にコイツ自身の存在が起こり得ない状況を作っているのである。

「何だ？」

「この手伝いが終わった後にやる事はあるのか？」

「当分の間はないな。」

彼女は俺の家にやってきた自称稲荷様を名乗る女、名前は鈴音と言
う。

「その空白の時間をただのうのうと過ごしているだけでは嫌なのじ
ゃ、何とか暇を持って余せんのか？」

「じゃあ外にでも行くか？」

「おお！良いのか!？」

どうやら我等が稲荷様は外出をしたがっている様だ、しかし俺には
まだ大量の仕事が残っていた。今やっている食器洗いも含めてその
他多数の仕事を終えるまでには時間が掛かる。

「それじゃあ仕事が終わった後に支度して行くか。」

「うん、よろしく頼むぞ。」

この生活を送る事になってから一週間が経過するが、彼女はすっかりこの生活に馴染んできていた。それは問題無い事でむしろありがたい事だ、厄介なのが食費が高む事や出張から帰って来た両親にどう説明すれば良いかとかの問題である。今回は鈴音を助けた事により、問題が発生してしまっただが俺はそれで良いと思っている。彼女の命を救えたのだから。

あれは丁度一週間ぐらい前の出来事だった、下校途中の俺の目の前に突然現れた片足を怪我した狐から事は始まったのだ。初めてその狐を見た時は左足に軽度だが傷を負っており出血していた、放っておけば危なくなると俺は感じた。俺は戸惑った、自分自身の手でもしこの一匹の狐が救えるのであれば、それが出来れば助けたいと思った。しかし下手な事したら俺の手でこの狐を殺してしまう事になりかねない。しかし、だからと言って目の前で危険に遭遇している者の命を見過ごす事は俺には出来なかった。何もせずにただ黙って命が消え逝くのを見ている事など出来る筈がない、そう考えて俺は決断した。

「(家までは後もう少し、この橋を渡ればすぐそこだ。)(おい!」

「!?!」

狐が驚きの反応を示しこちらに顔を向ける。その場から逃げようとするが左足の傷が痛み、走る事さえままならない状態であった。

「大丈夫だ、怖がるな。」

「…。」

「お前を助けてやる。」

俺はそう言っただけ狐を抱き抱え自分の家へと向かった。家の前までに辿り着くと何時も以上に電気が点いていない事に俺は気が付いた。俺は両親は今日から出張で遠隔地に出掛けていて弟もまだ学校から帰宅していない為、家には誰もいないと判断した。

「（しめた、これなら面倒臭い事にならなくて済むな。）」

もし両親がいたのであれば猛反対を受ける事は火を見るより明らかだった、母親に限っては大の動物嫌いで見ただけで騒ぎ出すという特性を持っていたのだ。俺は居間に使っていないバスタオルを何枚か敷き、そこに狐を寝かせた。

「（まずは傷口の消毒と止血する道具か。）待ってる、今何とかするから。」

俺は家にある医療用品を集め、また狐のいる居間へと戻り応急処置を実施する。

「（まずは消毒からだな。）痛いかも知れないけど我慢しろよ。」

傷口の血を拭き取り消毒液を付けた脱脂綿をピンセットで摘みながら傷口とその付近をペタペタと消毒液を塗り付ける、傷口に痛みが走ったせいだろうか一瞬狐の体がピクンと一回動きクウンと鳴いた。

「（後は止血か。）」

包帯を左足の傷口ができている部分に巻き縛って固定した、これでひとまずは大丈夫だろう。

「これで大丈夫だ、此処からは動くなよ。動くとも悪化するから。」

「…。」

俺はいくら何でも言う事を聞くはずは無いかと思いつた。狐を見守る事にしたが、意外に動かない。狐は警戒心の強い動物だと聞いた事があるが思った以上人間慣れしているのか、それとも俺を信用してくれたのか、それは分からなかった。

「ただいまー。…ん？」

「（しまった、帰って来たか。）」

「？」

俺の一つ下の弟である義人が玄関の戸を開けて入って来た、もしこの状況を奴に見られたらどうなるだろう。幸運な事に母さんの様に義人は動物は嫌いではなくむしろ好きな方であった。

「（アイツなら話せば分かってくれるかもしれん。かけてみるか。）」

俺は狐にちよつと行つてくるから此処を動くなよと告げて居間から出た。居間を出て右を見れば直ぐ玄関だが、そこには居間まで続いている無数の血痕をまじまじと見ている弟の義人の姿があつた。

「兄さん、これ何…?」

義人が床に付いている血痕を見ながら言った。

「（しまった、血痕の処理を忘れていたとは！ええい、こつなつたら仕方が無い！）単刀直入に言うぞ義人、現在我が家では動物を保護している。」

「え？そつなの?」

義人がこの事をすんなりと受け入れてくれる事を信じて俺は今此処で起こっている事を話した。

「…という訳なんだが、お前としてはどうだ？」

「別に良いんじゃないの？そのまま放っておいたら死んでたかも知れないんだし。」

「その返答を聞くに、承諾は得られたと判断して良いのか？」

「少なくとも僕の承諾はね。でも父さんと母さんが何と云うか。」

義人はこの件に納得してくれた様だ、これでとりあえず一段落ついた訳だ。後は両親の承諾が得られるかにかかっている。俺は義人にその狐を見せてやろうと思ひ、居間の襖を開けた。そこにはあの左足を怪我した狐が…。

「…。」

「…。」

「？」

居なかった。狐の姿は何処にも見えなかったが、狐が座っていたバスタオルの上に巫女服姿の金髪美少女が座っていた。その姿は美しく俺は見事に魅入ってしまった。恐らく義人も魅入ってしまったのであろう、この状況に対するリアクションが全く無い。しかしどういふ事だろう、何故狐が消えて美少女が突然狐と入れ替わったかの様に現れるのかと俺は思った。その時突然義人が俺に話かけてきた俺が保護したのが動物じゃなくて人間だった事に驚きを隠せていない様だ。俺もまさか道端で助けたのが狐じゃなく、金髪美少女巫女だったとは思わなかった。確かにあれは狐だった筈だが…。

「「ちょ、ちょっと兄さん、アレ狐じゃないよね？何処からどうみたらあの人が狐に見えるんだ！？」」

「いや…。（俺は狐に化かされたのか？いや、違う。）」

狐と金髪美少女巫女が何故入れ替わったか、その疑問は彼女の左足の状態を見た事で解けた。

「（あの包帯は間違い無い、あの狐だ。）少し聞いて良いですか？」

「何じゃ？」

俺は彼女に思い切って何者が質問する事にした、本人に聞いた方が人間か狐かハッキリさせる事が出来ると考えたのである。

「貴女は、狐ですか？」

「如何にも、我は先程お主に助けられた狐じゃ。」

やはりか…、左足の傷を見て自分の中で確信した。その確信は偽りではないという事が今証明出来た訳だが、この金髪狐美少女巫女を保護したは良いがこの後にどうするかを考えなくてはならなかった。

「えっ、狐って。貴女は人間じゃあ…。」

「分からぬ奴じゃな、ホレ。」

金髪美少女の頭から耳が、尻から尻尾が出現した。まさにそれらのものは彼女が狐だという一番の証拠であり、これを見て彼女を狐じ

やないと言える人間は居ないであろう。

「これでどうじゃ？」

「あ、は、はい。納得しました…。」

「分かれば良い。」

義人はまだ目の前の事実を信じられない様な仕草を見せている、まるでこれは夢だと自分自身に言い聞かせている様だ。俺は得に何の抵抗も無く彼女が狐である事を納得していた、事実彼女は狐であり人間にも化けられるのは否定出来ない事なのだから有りのまま受け入れるしか有るまいと考えたのだ。

「さて、これからどうするか。」

「とりあえず今は動かない方が良く、今日はゆっくりしていけ。」

まず怪我の完全治癒を先決させなくてはならない、せっかく助けた

のに危険に遭遇などさせてたまるかと俺は思った。

「我がこの様な姿を晒しても尚、お主は平気で自分の家に異なる者を泊めると言うのか？」

「関係無い事だな。」

「…フ、フフフ…。」

突然金髪美少女が笑い出す、何故突然笑い出したのか俺にはよく分からなかった。

「何か可笑しい事でも言っただか？」

「フフフ、すまんの。お主の様な奴は初めて見るが故、少し可笑しく思ってしまったのじゃ。」

「何とでも言え。とにかく今日は此処に泊まってけよ。」

「そつさせてもらう。」

「よし。あつとこんな時間だな。義人、飯を頼む。俺は寢床を準備するから。」

「え？う、うん。」

時計を見ると既に時間は19時を回っており、俺達は早速準備に取り掛かる。何時もなら両親が不在の場合部活から帰って来て直ぐに二人で準備を始めるのだが、今回は特別時間を大きくロスしてしまった。だがそんな事はどうでもいい事だ、消えそうな命を救えたのだから。

「（人間に命を救われようとは…。）」

思っていた事とはまったく反対の事が起きてしまった、本来であれば自分が助ける立場にある筈なのにこの様な形で助けられる事になるとは。

「（恩が出来てしまったな…。）」

恩を売られたのならきちんと返したいと思っているが、具体的にどのような形で恩返しをすれば良いのが私には分からなかった。それから数十分後に食卓の準備が整い、三人は居間の机の前に座った。

「これが今の時代の食べ物なのか？」

「うん、カレーライスって言うんだ。旨いから食べてみてよ。」

「うむ、では…。」

スプーンを使ってカレーライスを口に運ぶ。

「…美味しい。」

「良かった、口に合わないかと思ってたけど。」

「お主等、名前は何と言う？」

そついえば彼女の名前をまだ聞かせてもらっていないし、俺達も彼女に名前を教えていなかった。自己紹介をしている暇などなかった事を考えなければ、かなり遅い自己紹介である。

「俺は猛。」

「僕は義人。」

「猛に義人か。我は稲荷神の鈴音だ。」

「「え…?」」

もうこの人生の中で驚く事は殆ど無いと思っていたがそれは間違いであった、ただの金髪狐美少女だとばかり思ってた接していた彼女があの稲荷様だったとは俺達兄弟には思えなかった事であった。

「えっ…、稲荷神って、あの赤い鳥居が建ててある神社に奉られている神様…?」

「うむ、それがどうしたのじゃ？」

「い、いや、ちょっと内心驚いただけだよ。普通の狐かと思ったら稲荷様だったなんて…。」

「しかし何で神社に奉られている神様が、こんな平凡な家庭に？」

「うむ、何百年か前に外界を何回かうろついたりきり全く外へ出ておらん。久々に外界に出てこころ辺をうろついていたのだが、途中で足を怪我してしまった。しかしそこへ猛が来て我を救ってくれたのじゃ。我は感謝している。」

「当然の事をしたただだよ。」

「それでも…、我はお主等に恩を返したいと思っている。」

「鈴音さん…。」

「…我では…不服か…？」

彼女の、鈴音の仕草は可愛さや美しさがあり、俺はそれに魅せられながら鈴音の話を聞いていた。その可愛さや美しさに加え、若干頬を赤らめている点や何気に困り顔を浮かべている点についても俺の心は揺り動かされていた。

「（この頼みは、蹴れるものじゃないな。）分かった、その頼みを受け入れる。」

「…本当に良いのか？」

「神様の頼みだから断れないよ、それに…」

「それに、何じゃ？」

「せっかく助けた命が、また消えたりしたら困るからな。」

「…ありがとう。」

そしてそれから一週間後の今日までに至っている。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2580ba/>

俺の家族は稲荷様

2012年1月6日16時48分発行